人吉海軍航空基地跡の保存・活用の取り組みの成功と失敗の記録

―歴史保存と地域振興の実践記録―

経営管理研究科 講師
福田 晃市

【要約】

SBI 大学院大学で実学を重んじる筆者は、ライフワークとしている経世済民の取り組みの一環として、2014 年より熊本県人吉球磨地方で人吉海軍航空基地跡の保存･活用を通じた地域振興ボランティア活動（「有志会」を結成）を開始した。

人吉海軍航空隊や人吉海軍航空基地の歴史が忘れ去られゆく中、歴史愛好家としての思いと元予科練生からの「人吉海軍航空隊のことを後世に残してほしい」との想いを受けて活動を始め、地元自治体を巻き込むため、マンガ形式の冊子『終戦 70 周年記念企画　人吉球磨は秘密基地』を作成・配布した。これが契機となり錦町役場にプロジェクトが発足し､後に錦町立人吉海軍航空基地資料館（「ひみつ基地ミュージアム」）の開館に繋がる。

活動には、私費による遺構の「見える化」や、広報物作成時の役場連絡先の利用による信頼性向上、公的資金援助を避けた「肥後の引き倒し」（他者の成功を阻害する集団的風潮）への対策、商業出版や SNS・YouTube、ゼロ戦の飛行の利用といった多様な広報戦術を用いた。

また、有志会の活動が呼び水となり、地域住民や地域経済団体による人吉海軍航空基地跡の保存や活用のための自主的な取り組みにもつながっていった。

しかし、錦町立人吉海軍航空基地資料館の開館後、費用対効果を高めるための「３館連携戦略」（錦町立人吉海軍航空基地資料館、軽巡洋艦球磨記念館、高木惣吉記念館が相互に連携して、人吉球磨地域における「海軍」観光を振興する戦略）は、官民の連携不全により頓挫。筆者らは人吉海軍航空基地跡の取り組みからは手を引き、民間の２館を中心とした活動を継続する。

今回の取り組みは、地域に「海軍」という新たな観光カテゴリーを確立させた一方で、人吉海軍航空基地跡における取り組みの成果を、その後のさらなる成果につなげられなかったという苦い教訓も残した。筆者はこれらの成功と失敗の経験を後進の参考に供するために実践記録として記述した。

【キーワード】

地域振興､地方創生､地域振興ボランティア活動､戦跡の保存と活用､歴史の継承､「肥後の引き倒し」､「狡兎死して走狗烹られ、飛鳥尽きて良弓蔵わる」

【目次】

はじめに
1　人吉海軍航空基地跡を保存・活用するための取り組み
2　広報面での工夫

３　有志会の活動に連動した民間の取り組み
４　人吉球磨地域における阻害要因としての「肥後の引き倒し」の考察
５　３館連携戦略の誕生と挫折
おわりに

はじめに

あくまでも筆者の認識であるため誤解があるかもしれないが、SBI 大学院大学では、人間学に基づく実学、すなわち世のため人のためになる実践的な学問を重んじている。筆者は開学当初から教員の末席に加えていただき、中国古典を紹介する機会をいただいてきた。その中で、私が経世済民の実現をライフワークと見なしてきたこともあり、学問を言葉で語るだけでなく、行動で示すことの重要性を痛感し、世のため人のために活動する機会を模索してきた。

幸いにも約 10 年前、2014 年 11 月から、居住地である熊本県の人吉球磨地方において、人吉海軍航空基地跡の保存と活用を通じた地域振興ボランティア活動に取り組む機会を得た。この取り組みは、軽巡洋艦球磨記念館の開設や、高木惣吉記念館のリニューアル事業にも発展し、地域の歴史的資源の保存と活用に貢献してきた。

本稿は、これらの活動における成功と失敗の経験を、後進の参考となるよう実践記録として記述するものである。具体的には、人吉海軍航空基地跡の保存と活用に焦点をあて、その取り組みから得られた教訓を詳述する。

１．人吉海軍航空基地跡を保存・活用するための取り組み

1.1　人吉海軍航空基地跡とは何か

第二次世界大戦中に人吉球磨地方に建設された海軍の航空基地が人吉海軍航空基地であり、基地には人吉海軍航空隊が置かれ、予科練の訓練のために使用された。

筆者が人吉海軍航空基地跡を保存・活用するための取り組みをはじめた 2014 年当時、人吉海軍航空基地跡を取り巻く状況は、地下に人吉海軍航空基地の遺構が残っていることは「地元でもあまり知られていない」[1] 状況であり、「時間の経過とともに存在そのものが忘れ去られて」[2] いっているという状況であった。何もしなければ、人吉海軍航空基地や人吉海軍航空隊の歴史は忘れ去られてしまう状況にあったと言える。

1.2　取り組みの動機及び人員

人吉海軍航空基地や人吉海軍航空隊の歴史が忘れ去られゆく状況のなかで、筆者は次の３つの理由から、その歴史を後世に残したいと考えた。

第一に、歴史愛好家としての思いがある。歴史愛好家として、目の前に失われそうな歴史があるなら、それを残したいと思ったのである。

第二に、元予科練生との出会いがある。かつて人吉海軍航空隊に所属し、基地で訓練した予科練生の方々が、人生の終わりを迎える前に最後に一度だけ思い出の基地跡を見ておきたいとして訪れるこ

1 「地下の戦争遺跡に光を」『朝日新聞』2015 年 2 月 26 日、朝刊
2 「「人吉海軍航空基地資料館」オープン」『西日本新聞』2018 年 8 月 2 日、朝刊

とがあった。その方々と出会い、人吉海軍航空隊の歴史を後世に伝えてほしいと託されたからである。

第三に、上記の取り組みの結果として、人吉海軍航空基地や人吉海軍航空隊の保存と活用が、地域の観光に「海軍」という新たなカテゴリーを加えることになり、地域の観光振興にも役立つと考えたからである。

以上の３つが、筆者が人吉海軍航空基地や人吉海軍航空隊の歴史を後世に伝えるために活動しようと考えた動機である。

この活動のために筆者は「人吉海軍航空隊を顕彰する有志の会」（略称「有志会」）を結成、故・新堀徳人志（当時 80 代）及び金山充（当時 60 代）をメンバーに加えて活動した。なお、筆者は当時 40 代であった。

新堀は戦時中、基地に出入りしていたことから、基地の情報に詳しく、その知識は基地跡の調査に役立った。また、郷土史家の団体にも所属し、積極的に郷土史の保存と活用に取り組んでいた。

金山は自衛隊での訓練経験があり、その経験は人吉海軍航空基地跡の遺構発見に役立った。なお、金山の友人の親戚が、人吉海軍航空基地の戦後処理責任者であった遊橋辰雄少佐の三男と縁戚関係にあったことから、そのつながりで終戦時の人吉海軍航空基地に関する情報を得ることもできた。

1.3　取り組みの費用

ことわざにも「先立つ者は金」と言われるように、活動には資金が必要となる。筆者ら有志会の活動では、すべて私費で賄った。公的資金援助や、クラウドファウンディング等を活用した民間からの資金調達は皆無であった。

その理由は、外部からの資金を得れば、外部からの控制を受け、自由に動けなくなる可能性があるからである。また、後述する「肥後の引き倒し」にもあるが、公的資金援助を得ることで妬みの対象となり、足を引っ張られる可能性もありえるからであった。

ただし有志会メンバーはいずれも潤沢な資金を有しているわけではなかった。そのため資金不足を補うために知恵と工夫が重要となった。個人的には、大学院で講義している中国兵法の知恵が大いに役立ったと考えている。

1.4　地元自治体を巻き込む

筆者は、人吉海軍航空隊と人吉海軍航空基地の歴史を後世に伝えるためには、地元自治体に人吉海軍航空基地跡を教材や観光資源として活用してもらうのが早道ではないかと考えた。

当時、筆者は次のような話を聞いたことがあった、筆者らが取り組みを開始した 2014 年当時、国策として「まち・ひと・しごと創生法」が施行されたわけだが、その施行にともなって、各自治体は国から地域振興の資金を得るためには、自分たちで地域振興のプランを考える必要があるものの、地域振興策を思いつかずに困っている自治体も多い。そんな話だ。

これに関連して、『過疎ビジネス』に次のような記述があるので、当時の筆者が聞いた話もあながち間違いではなかったと思われる。

「二〇一四年に『まち・ひと・しごと創生法』が成立し、国は人口減少や東京一極集中に歯止めをかけようと、全ての自治体に地方版総合戦略の早期策定を求めた。戦略を策定して国の認可を得なければ交付金がもらえない。（中略）多くの自治体は、戦略の策定作業を行う人手もノウハウも不足し

ていたのだ。」[3]

筆者は、次のように仮定した。もし地元自治体が地域振興策で困っているのなら、人吉海軍航空基地跡が教材や観光資源として地域振興に役立つと地元自治体に考えてもらうことによって、地元自治体も人吉海軍航空基地跡の保存・活用のために動くはずだ。

そこで、そのための広報を始めることにした。

1.5　広報資料の作成

筆者らは、まず人吉海軍航空基地跡の遺構がどれだけ残っているのかをフィールドワークをとおして把握した。

続いて、その調査結果を整理して掲載した冊子『終戦 70 周年記念企画　人吉球磨は秘密基地』を作成した。特徴はマンガ形式を採用したことである。一般的に遺構の調査結果は、マンガ形式ではない。そこで、マンガ形式にすれば、珍しいので、目立ちやすく、印象に残りやすいのではないかと考えたのである。『孫子』の兵法で言うなら「奇」にあたるであろう。

最後に上記冊子に別添 1 のような送付状を添付し、人吉海軍航空基地跡の保存・活用が地方創生に役立つであろうことを明示したうえで、人吉球磨地域の各自治体等に送付した。

結果は思惑どおりとなり、地元自治体である錦町役場に「人吉海軍基地跡活用研究プロジェクト」が発足し、地元自治体が人吉海軍航空基地跡の保存･活用に取り組む姿勢を示した。本件については、いくつか報道がなされているので、参考までに引用して紹介する。

「漫画自作し紹介　地域活性へ期待（中略）時空を超えた 2 人がやりとりする漫画『人吉球磨は秘密基地』の一コマ。人吉海軍航空隊の地下施設を調査した福田晃市さんが、『施設の存在を知ってもらい、活用を』とアピールするために作った。（中略）作品はネットで読めるようにし、50 部を印刷して地元の自治体などに配った。」[4]

「錦町も人吉海軍航空隊基地跡に関心を示している。福田さんの漫画冊子を読んだ町企画観光課の藤芳純課長は、『地域活性化の素材になりそう。地元の人が地域を誇りに思える材料になるのでは』と期待する。庁内には『同基地跡活用研究プロジェクト』も発足。座長を務める町教育委員会の手柴智晴さんは『保存策と教育や観光などへの活用策を模索したい』と話している。」[5]

「そんな〝秘密基地〟に再び光を当てたのは 1 人の地域住民だった。職場が基地跡にある福田晃市さん（46）は、周辺の桜が旧海軍の植えたものだと聞き興味を持った。『海軍がなぜ山の中に植樹したのか』。疑問を抱きつつ戦中の地図を調べ、錦町に基地があったことを確かめた。2014 年秋には友人と現地に赴き、地下遺構をその目で見た。『平和教育や観光に活用できないか』そう考えた福田さんは、有志の会を結成。遺構を紹介するパンフレットを作製するなど、ＰＲ活動を始めた。当初、住民の反応は鈍かったという。その後、森本完一町長の目に留まり、遺跡巡りツアーの開催や、今回の資料館建設へつながった。『若い人へのアピールを意識している』という福田さん。できるだけ多

3　横山薫／『過疎ビジネス』／集英社新書／ 2025 年／ p142
4　「地下の戦争遺跡に光を」『朝日新聞』2015 年 2 月 26 日、朝刊
5　「地下の戦争遺跡に光を」『朝日新聞』2015 年 2 月 26 日、朝刊

くの人の関わってもらい、戦争や平和について考える場が広がることを願っている。」[6]

「錦町の人吉海軍航空隊基地跡を調査し、地下施設の全容を解明した郷土史家の福田晃市さん（43）＝錦町＝と、金山充さん（64）＝湯前町＝の２人の活動の成果は、戦後 70 年の節目に、地元住民や行政を巻き込んだ基地跡の保存、活用運動へと発展しつつある。」[7]

以上に紹介した記事のとおり、筆者らの活動は、個人の自己満足に終わるものではなく、社会的に成果として認識されるものであった。

1.6　錦町立人吉海軍航空基地資料館の開館

上記のとおり、筆者ら有志会メンバーは、人吉海軍航空基地跡の保存・活用に関して、地元自治体を巻き込むことに成功した。そして、錦町立人吉海軍航空基地資料館の設置によって、人吉海軍航空基地や人吉海軍航空隊の歴史も後世に伝わりやすくなったと言えるだろう。

なお、本件については、先行研究に概略が記されているので、該当箇所を引用する。

「ひみつ基地ミュージアム建設のきっかけは、福田らが錦町役場に研究成果として 2015 年２月に『終戦 70 周年記念企画　人吉球磨は秘密基地』を提出したことである。錦町の動きは素早く、同年同月に保存活用のためのプロジェクトチームを立ち上げ、有志会と官民一体の取り組みとして 2016 年に町内研究会をスタートしながら、町民向けにもオウンドメディアである『広報　錦』を通じて、基地の観光活用に一定の意義があることを啓蒙し始めている。さらに同年、内閣府の地方創生交付金に応募し、拠点整備交付金の予算を 2017 年度と 2018 年度に獲得した。これにより、2018 年にミュージアムを開館するための原資を得たわけである。」[8]

この内田氏の指摘からもわかるように、筆者らの活動は、地方創生交付金の給付という公的な成果に結びつくプロセスを生み出した点で、個人の取り組みでもやり方によっては公的な成果に結びつくということを立証できているのではないかと考えている。

1.7　独自の遺構整備

当初、人吉海軍航空基地跡の遺構は、ほとんどが草木や土砂に埋もれていた。そのままでは観光資源としては役立たない。そこで、遺構を「見える化」して、遺構の見学者が見学しやすいように私費で整備した。

具体的には、人吉海軍航空基地跡の遺構の１つである「隊門下格納庫」跡周辺の倒木の片付けや、除草を行った。また、「松根油乾溜作業所」跡の倒木や土砂の撤去、除草を行った。必要に応じて重機類もレンタルし、作業した。「隊門」まわりの除草は頻繁に行い、美観の維持に努めた。これらは有志会メンバー３人の私費と労力で行った。

---

6 「「人吉海軍航空基地資料館」オープン」『西日本新聞』2018 年８月２日、朝刊

7 「語る伝えるくまもと戦後 70 年　戦跡の記憶　人吉海軍航空隊　下」『熊本日日新聞』2015 年

8 内田純一／「第６章　旧軍のバトルフィールド・ツーリズム―人吉球磨の海軍遺産による観光振興の取り組みを中心に」／『いま私たちをつなぐもの - 拡張現実時代の観光とメディア』／弘文堂／ 2021 年／ p110 ～ p111

このうち「松根油乾溜作業所」跡は、報道に「福田さんらの調査で判明した基地跡の松根油乾留工場跡」[9]とあるように、その発見は有志会の成果の１つでもあった。この遺構は、2025 年 10 月現在、錦町立人吉海軍航空基地資料館の「プレミアムプラン」に組みこまれて公的に活用されている。

２　広報面での工夫

2.1　独自のマルチメディア広報の実施

人吉海軍航空基地跡を保存・活用するために取り組んだ筆者ら有志会メンバー３人は、潤沢な資金を有しているわけではないため、資金の不足を知恵と工夫で補う必要があった。それは広報面でも同じで、多額の宣伝広告費を使って宣伝することもできない。そこで、以下に紹介するような方法を使って、独自の安上がりなマルチメディア広報を行った。以下は、その主なものを紹介する。

2.2　私費で広報物を作成し、その問い合わせ先を役場とする

筆者は、人吉海軍航空基地跡の広報のため、私費でポスターやリーフレットなどの広報物を作成した。その問い合わせ先には、役場の許可を得て、役場の連絡先を記載した。（別添２）（別添３）

役場を問い合わせ先とした理由は、次のような２つの効果が期待されたからである。ただし、そこから２つの課題も見つかった。

【期待された効果】

①信頼性の向上 : 問い合わせを検討している人々が、公共機関が関わっていると認識することで、安心して連絡しやすくなる。

②配布ルートの拡大 : 観光案内所などでは、私人が作成した広報物よりも、公共機関のものがスムーズに取り扱われる。

【生じた課題】

①製作主体の誤解 : 民間有志による 100％の出資で製作し、デザインも民間有志が独自に行ったが、役場が製作したと誤解されるケースが見られた。

②民間有志の活動の認識不足 : 活動の主体が役場だと認識されたため、民間有志の活動が十分に認知されない状況が発生し、マスコミ取材の対象から外れるなどの影響があった。

なおポスターについては次のような新聞報道もなされている。

「有志の１人で郷土史研究家の福田晃市さん（44）＝（同町）＝が中心となり、基地跡の知名度を上げようとポスター作りを発案。（中略）２次元コードを携帯電話などで読み込むと、町が製作した基地跡を紹介するサイト「人吉球磨は秘密基地」が開く。」[10]

このとき、先に紹介した人吉海軍航空基地跡を紹介するマンガを錦町役場に無償提供しており、錦町役場の公式サイト上で閲覧できるようにすることによって、人吉海軍航空基地跡について知りたい方が情報を得られるようにもしていたのである。

なお、広報物を作成するにあたり、公的な資金援助を求めなかった理由は、のちに述べる「肥後の引き倒し」対策のためでもあった。すなわち、人吉球磨地域での取り組みで痛感したのは、公的な資金援助を求める私人や団体等が多く、もし公的な資金援助を得たなら、公的な資金援助を得られなかった私人や団体等から妬まれ、足を引っ張られる懸念があるということであった。そこで、足を引っ張

9 「人吉海軍航空基地跡　観光活用を調査　小樽商科大の内田教授訪れ」『人吉新聞』2018 年 3 月 10 日

10 「航空隊基地跡　ポスター　英文でも PR」『熊本日日新聞』2016 年 11 月

られないようにするため、公的な資金援助を求めず、すべて私費で賄うこととしたのである。

2.3　商業出版の利用

広報活動の一環として、筆者の著作『マンガでわかる孫子の兵法 』（2016 年、新星出版社）を活用した。本書は、高校生たちが戦争遺跡を地域振興に役立てるストーリー仕立ての漫画と、ビジネスへの応用を解説する本文を連動させ、『孫子』13 篇を順番に解説したビジネス書である。本書の中で、筆者は、戦争遺跡が単なる歴史教材としてではなく、観光資源としての潜在的価値も持っていることを明示した。それは人吉海軍航空基地跡が観光資源としての価値を持つことを暗に示すことを目的としたものであった。

筆者は、たとえば、本書の「おわりに」に次のような記述を組み込み、人吉海軍航空基地跡の広報につながるように工夫した。

「マンガ原作を作成させていただくにあたり、筆者が関わっている、熊本県・球磨郡にある戦跡を活用した地域振興の取り組みをベースに、物語を構想しました。物語の舞台である K 郡は、この球磨郡をイメージしています。球磨郡は、自然の豊かな風光明媚なところで、温泉町としても知られています。夏が来る前には川にホタルが舞い、神秘的な森や古墳、そして戦跡もあります。マンガはフィクションですが、マンガに登場したような『３つの魅力』は実在しているわけです。球磨郡の戦跡は人吉海軍航空隊の基地跡で、今でも多くの遺構が残っています」[11]（この文章に続けて、人吉海軍航空基地跡を観光資源として活用する取り組みを記述した。）

このアプローチは、自費出版ではなく商業出版という形態をとることで、副次的に以下の効果をもたらした。

【権威性と信頼性の獲得】

商業出版物は、市場での評価や編集者の選定を経ているため、主張内容に権威性と信頼性が付与され、人々に受け入れられやすくなる。

【広範な宣伝効果】

市場に流通することで、より幅広い読者層にアピールでき、宣伝効果が期待できる。

2.4　PR のぼりの設置

2017 年 5 月頃、人吉海軍航空基地跡数か所に「人吉海軍航空基地跡」と明記したのぼりを設置した（別添 4）。期待した効果は、地域住民や来訪者に対し、人吉海軍航空基地跡の保存・活用が進んでいることを目に見える形で示すことにあった。

人吉市内の宿泊業者の希望に応じて、当該業者に無償で提供したこともある。

2.5　テレビ放送

熊本放送（RKK）の情報番組『週刊山崎くん』（2015 年 11 月 18 日放送）の企画「明日話したくなる！熊本超雑学」において、「錦町に眠る海軍航空隊地下基地」として人吉海軍航空基地跡が取り上げられた。この放送は、広報活動の初期段階における重要な成果であった。また、NHK 熊本の取材として、2015 年、「九州沖縄　戦後 70 年　錦町　明らかになる旧海軍地下施設」として放映された。

11　福田晃市／『マンガでわかる孫子の兵法』／新星出版社／ 2016 年／ p230

2.6　SNS 活用

Facebook ページ『人吉球磨の海軍遺産』（現『人吉球磨の軍事遺産』）[12] において、民間有志の活動を不定期で発信した。民間有志が自己資金と労力を投じて取り組む姿は、その真摯な姿勢が人々に伝わり、活動への支持と共感を広げることにつながった。

2.7　YouTube 動画配信

人吉海軍航空隊や人吉海軍航空基地跡を紹介する動画を作成し、動画配信サイト YouTube で配信した。[13] このチャンネル内の動画のうち「30 分以内で分かる！人吉海軍航空基地」[14] は、2016 年 2 月の人吉ロータリークラブの例会で上映された。この動画は、人吉海軍航空基地跡の歴史を物語風に構成し、映像と音楽を効果的に用いることによって、視聴者の感情に訴えかけることを意図した。その目的は、視聴者の同基地跡に対する好感度を高めることにあった。

2.8　ゼロ戦

海軍機として有名な「ゼロ戦」が人吉海軍航空基地跡上空を飛行した。このニュースは、同基地跡を観光資源として役立てるにあたり、有望顧客となる旧日本海軍に興味のある層に同基地跡の存在を知らせるために有効な手段になることが期待された。

本件については、次のように報道されている。

「戦時中の日本海軍主力戦闘機・ゼロ戦（零式艦上戦闘機）が、錦町木上の人吉海軍航空基地跡に飛来し、日本人の操縦者が旋回などで同基地跡の保存、活用にエールを送った。民間有志が私財で保存、活用を進める同基地跡の支援に向け、ゼロ戦の『里帰りプロジェクト』に取り組む㈱ゼロエンタープライズ・ジャパンが、熊本、鹿児島でのイベントに合わせて、今回特別に行ったもの。」[15]

なお本件は、株式会社ゼロエンタープライズ・ジャパンのスポンサーの 1 人であった株式会社サンセルモ代表取締役社長の安田幸史氏の好意によるものであった。「安田さんは、日本で唯一現存するゼロ戦のスポンサー。一昨年秋に錦町木上の人吉海軍航空隊跡の上空にゼロ戦を飛行させた関係者の一人」[16] と報道されている。安田氏は、軽巡洋艦球磨記念館や、旧戦友会の予科練人吉会の記念公園「望岳苑」の管理などに対しても、支援をしている。

2.9　PR キャラクターの設定

熊本県の「くまモン」や、彦根城の「ひこにゃん」など、PR（広報）にキャラクターが使われることがある。人吉海軍航空基地跡でも、筆者がイラストレーターに広報用のキャラクター作成を依頼した。費用は筆者が負担した。筆者は、このキャラクターを錦町役場に広報用として無償提供した。錦町役場はキャラクター名の公募を行い、選考の結果「クマリン」と命名された。この結果は、平成 28 年 9 月 27 日付の熊本県錦町役場のプレスリリースにおいて報道関係者各位に通知された。

当該キャラクターは上記「2.2　私費で広報物を作成し、その問い合わせ先を役場とする」の広報

12　人吉球磨の軍事遺産（旧「人吉球磨の海軍遺産」）https://www.facebook.com/yamanakakumarin

13　人吉球磨の海軍遺産チャンネル https://www.youtube.com/channel/UCCC933SQFSP4WuM2ibJoDhg

14　「30 分以内で分かる！人吉海軍航空基地」https://youtu.be/pkN8nWox67s?si=mibFvCH6wgIddUyF

15　「活用応援へ「ゼロ戦」飛来！人吉海軍航空基地跡　上空旋回に「懐かしい」」『人吉新聞』2017 年 11 月 14 日

16　「よけまん駄語　記念館の支援を惜しまず」『人吉新聞』2019 年 1 月 12 日

物や、上記「2.4　PR のぼりの設置」の PR のぼりなどに使われ、PR キャラクターとしての役割を果たした。熊本中央信用金庫錦支店の窓にも当該キャラクターが描かれた。また、当該キャラクターについては 2018 年 8 月 8 日放送の NHK『ニュースウォッチ 9』でも取り上げられた。

（別添 1 ）

自治体関係者各位
ニュースリリース

人吉海軍航空隊を顕彰する有志の会
広報担当　福田晃市
連絡先 abab@mx7.tiki.ne.jp

地方創生!! 実は地元でも知られていない規模をもつ
人吉海軍航空隊基地跡をご紹介

人吉海軍航空隊基地跡をご紹介するパンフレットができあがりました！

1．戦後７０年の節目だから注目される戦跡

今年は終戦70年の節目ですが、人吉球磨には人吉海軍航空隊基地があります。この機会に人吉海軍航空隊のことを知ってもらうため、その戦跡やエピソードなどを紹介したパンフレットを作成いたしました。現在、新聞、ラジオ、テレビ、インターネットなどを通じて、人吉海軍航空隊基地跡を地道に広報しているのですが、その一環となります。

2．歴史教材や観光資源としての活用で地方創生に貢献

人吉海軍航空隊基地跡には、意外と多くの戦跡が残されています。それは、戦跡調査の専門家から「これだけの地下施設が現存しているのは県内でもここだけ」（2014/11/28付・人吉新聞）、「この地域には地下施設が密集しており、価値は高い」（2014/11/28付・熊本日日新聞）と評価されるほどです。とりわけ地下発電所跡は「海軍の地下発電施設を研究する上でも非常に大きな発見」（2014/10/21付・熊本日日新聞）と言われています。ですから、歴史教材としても、観光資源としても、役立つと思われます。

※参考①鹿児島県では、戦跡の活用として知覧が有名ですが、鹿屋市でもパンフレット「鹿屋市の戦争遺跡」を作成するなど、積極的にPRしています。
※参考②宇佐市では「宇佐航空隊平和ウォーク」として、戦跡を活用して地域振興を図っており、すでに10年を経過しました。同イベントには、毎回、多数の来客があるようで、地域の活性化に貢献しています。

3．人吉海軍航空隊基地跡をご紹介するパンフレット

人吉海軍航空隊基地跡の戦跡ですが、残念ながら、地元の人ですら、その規模の大きさを知りません。そのせいでしょうか、人吉海軍航空隊基地跡は歴史教材や観光資源として十分に活用されていません。地方創生が求められる今日、これはまさに「宝のもちぐされ」ではないでしょうか。

そこで、人吉球磨の振興に少しでも役立てばと思い、今回、このようなパンフレットを作成させていただいた次第です。

今後の課題

観光地としての整備や、遺構の本格的な調査などが不十分ですので、今後の人吉球磨の観光関係者、教育委員会等の関わりが重要です。

人吉海軍航空基地跡の保存・活用の取り組みの成功と失敗の記録

（別添２）ポスター

（別添４）ＰＲのぼり

（別添３）リーフレット

表面

3　有志会の活動に連動した民間の取り組み

3.1　有志会メンバーによる独自の取り組み

人吉海軍航空基地跡の保存・活用のため、有志会の活動に連動する形で、地域住民および地域経済団体による自発的な取り組みも見られた。筆者は、これらの取り組みは人吉海軍航空基地跡の広報にとっても有益であった、と考える。

3.2　故・新堀徳人志氏によるボランティアガイド活動

有志会メンバーである故・新堀徳人志は、ボランティアで人吉海軍航空基地跡のガイドを務めるなど、同基地跡の広報に貢献した。その活動の一例については、次のとおり報道された。

「あさぎり町岡原支部の畜産会（平田作實会長）は 27 日、錦町木上にある人吉海軍航空隊基地跡を視察し、現存する貴重な地下施設に理解を深めた。昨年の戦後 70 年から同基地跡がスポットを浴びる中、畜産仲間で同基地跡の調査研究を進める新堀徳人志さん（84）＝同木上由留木＝に案内を依頼した。」[17]

3.3　前田光義氏による隊門の私費修復

地域住民の前田光義氏は、人吉海軍航空基地跡の隊門 4 基を私費で修復した。この取り組みについては次のように報道されている。

「昨年、前田さんは風雨で傷み始めた隊門の一部を修復し、看板を掛け直した。『父が精魂込めた隊門だから、できるなら今後もここにあってほしい。戦争を知らない若い人たちが当時を知るきっかけになる』」[18]

「戦後 70 年の今夏、左官職人だった父・実さんが 73 年前に造り、小学 4 年生だった自分も手伝った人吉海軍航空隊（錦町木上）の隊門 4 基を修復し、『父も喜ぶ』と語る。」[19]

この取り組みには有志会メンバーである金山充も協力した。

3.4　地域経済団体による取り組み

有志会メンバーの金山充の知人である伊藤昌一氏は、2017 年頃、当時、人吉球磨地区商工連絡協議会会長であったが、金山充を通じて知った筆者らの人吉海軍航空基地跡の保存・活用の取り組みに関心を示し、筆者に対して協議会メンバーへのレクチャーを非公式に依頼した。

その後、人吉球磨地区商工連絡協議会は 2017 年 7 月の通常総会において「人吉海軍航空基地跡を活用し、市町村の垣根を超えた広域観光を図る新規事業に取り組むことを決めた。」[20]

また、同協議会は、人吉海軍航空基地跡の活用の一環として、「海軍カレー」「海軍スイーツ」の提供を実施した。この取り組みについては、次のように報道されている。

「人吉球磨地区商工連絡協議会（会長・伊藤昌一湯前町商工会長）はこのほど、人吉球磨の海軍カレーや海軍スイーツを紹介する『海軍グルメ』ガイドマップ（中略）を発行した。平成 27 年に錦町木上、

---

17 「手掘りの跡に驚嘆　人吉海軍航空隊基地地下施設　岡原の畜産会員が視察」『人吉新聞』2016 年 1 月

18 「無言の語り部　戦後 72 年　人吉海軍航空基地跡」『毎日新聞』2017 年

19 『人吉新聞』2016 年 7 月 29 日

20 「垣根を超え事業展開へ　人吉球磨地区商工連絡協　海軍航空基地跡に〝照準〟」『人吉新聞』2017 年 8 月 2 日

相良村にまたがる人吉海軍航空基地跡の全貌が明らかになり、海軍と言えば『海軍カレー』ということで、人吉球磨ならではの『海軍カレー』『海軍スイーツ』を楽しんでもらおうと、数年前から準備を進めていたもの。」[21]

以上のとおり、人吉海軍航空基地跡を保存・活用する取り組みは、地域住民や地域経済団体の協力を得て、比較的スムーズに進んでいった。

4　人吉球磨地域における阻害要因としての「肥後の引き倒し」の考察

4.1　肥後の引き倒し

筆者は、人吉球磨地域における地域振興ボランティア活動を通じて、不当な批判によって活動が阻害される場合があることを経験した。その経験の一例として、ここでは、2018 年に発生した人吉海軍航空基地資料館（「ひみつ基地ミュージアム」）に関する事例を紹介する。

この事例は、活動を妨げる不当な批判が存在した可能性を示唆しており、筆者はこの現象を、地域文化に根ざした慣用句である「肥後の引き倒し」と暫定的に定義する。ここでは、他者の成功を阻害しようとする集団的な風潮を説明する概念として、この言葉を使用する。

4.2　事例の概要

事例の概要だが、2018 年９月、熊本県内の市民団体が、新たに開館した錦町立人吉海軍航空基地資料館の運営に関して、町長に改善を要望する出来事があった。この要望活動は、当時の新聞記事にも掲載されている。例として２紙を紹介する。

【例１：『熊本日日新聞』の報道】

二つの市民団体が「平和希求」を設置条例に明記するよう要望したこと、また「館の愛称やキャラクターを用いた PR 方法が、戦争の悲惨さが感じられず不適切」と指摘したこと等を報じた。[22]

【例２：『人吉新聞』の報道】

上記と同様の要望活動について報じる中で、要望の根拠とされた「来館された多くの方の感想として（中略）不備があげられる」ということに関して、ある代表者が「実際は来館者に聞いていない」と発言したことを伝えている。[23]

4.3　事例の分析

ここで問題となるのは、「実際は来館者に聞いていない」にも関わらず、「来館された多くの方の感想として（中略）不備があげられる」ことを根拠として批判を展開している点である。批判の根拠が不当なら、その批判は不当な批判となる。

不当な批判は、批判された活動を阻害する大きな要因となりうる。筆者は、この事例に見られるような、事実に基づかない批判が展開された状況を、「肥後の引き倒し」という概念で捉えることが可能ではないかと考える

21 「人吉球磨地区商工連絡協　海軍グルメガイドブック発行」『人吉新聞』2018 年７月 12 日

22 「「平和希求」条例に明記を　市民団体　海軍資料館で錦町に要望」『熊本日日新聞』2018 年９月８日、朝刊

23 「史料館の拡充など要望　人吉海軍航空基地　市民団体が錦町に」『人吉新聞』2018 年９月８日

以上のように人吉海軍航空基地跡を保存・活用する取り組みに対しては、全面的な賛同や協力があったわけではなく、「肥後の引き倒し」のような阻害もあったのであった。

5　３館連携戦略の誕生と挫折

5.1　３館連携戦略のはじまり

錦町立人吉海軍航空基地資料館（「ひみつ基地ミュージアム」）の開館により、筆者らの進めてきた人吉海軍航空基地跡を保存・活用するための取り組みも安定した基盤を確立できたと言える。

しかし、錦町立人吉海軍航空基地資料館の来訪者が少なく、費用対効果が低いとなれば、いずれ有権者や納税者等、地元住民からの批判も高まり、その存続も危うくなりかねない。そうなると、人吉海軍航空基地跡の保存・活用にとってマイナスとなってしまう。

そこで考えたのが、３館連携戦略である。人吉球磨地域には、錦町立人吉海軍航空基地資料館の他に旧日本海軍関連の記念館として、高木惣吉記念館と軽巡洋艦球磨記念館がある。

高木惣吉記念館は、熊本県人吉市に所在する民間施設である。ここには人吉市出身の海軍少将である高木惣吉の遺品や資料が展示されている。高木惣吉は終戦工作で有名な人物である。

軽巡洋艦球磨記念館は、熊本県球磨郡湯前町に所在する民間施設である。この施設は、市房山神宮（熊本県球磨郡水上村）の神様が旧日本海軍の軽巡洋艦「球磨」の守護神となったことにちなんで、市房山神宮の里宮内に設置された。軽巡洋艦「球磨」や旧日本海軍に関する資料が展示されている。

それらが錦町立人吉海軍航空基地資料館と連携すれば、「海軍」を目当てとした来訪者の人吉球磨地域における滞在時間を長くすることができる。来訪者の滞在時間が長くなればなるほど、人吉球磨地域での支出も多くなると見込まれることから、地域経済に対する少なからぬ貢献が期待される。そうなれば、錦町立人吉海軍航空基地資料館の存在も地域から好意的に受け入れられ、批判も抑制されるであろう。筆者はそのように考えたのである。

本件に関しては、先行研究において、次のように評価されている。

「３館連携の取り組みによって、人吉球磨が『旧海軍のバトルフィールド・ツーリズム・デスティネーション』というカテゴリーで認識されるようになれば、これまで日帰り客が多く、通過型の観光地だった人吉球磨エリアの観光形態が大きく変わるかもしれない。そして、当地を訪れるツーリストの属性が単一でなく多層的であることも、３館連携によって観光地としての発展がますます期待できる理由である。」[24]

この３館連携を推進するため、筆者は別添５、別添６のような３館連携を広報するためのリーフレットを作成し、配布した。また、本件に関しては、SNS での紹介も行った。

24　内田純一／「第６章　旧軍のバトルフィールド・ツーリズム―人吉球磨の海軍遺産による観光振興の取り組みを中心に」／『いま私たちをつなぐもの - 拡張現実時代の観光とメディア』／弘文堂／ 2021 年／ p 119

人吉海軍航空基地跡の保存・活用の取り組みの成功と失敗の記録

（別添５）

表紙　裏表紙　中に巻き込まれる面

軽巡洋艦「球磨」のことがわかる展示施設

軽巡洋艦球磨記念館

住所　球磨郡湯前町下城3280-1
電話　0966-43-3032
（市房山神宮里宮神社内）

開館時間　9:00～17:00
（お問い合わせください）
休館日　年中無休
（お問い合わせください）
入館無料、無料駐車場あり

熊本県下唯一の艦内神社

市房山神宮の神様は、軽巡洋艦「球磨」の守護神として、その艦内神社におまつりされていました。そうしたご縁もあり、境内に軽巡洋艦球磨記念館をもうけ、当時の資料などをつうじて軽巡洋艦「球磨」やその時代のことをご紹介しています。日本の戦争の歴史を若い世代に継承していく一助となれば幸いです。

高木惣吉記念館

「救国の功臣」

本土決戦の惨禍から日本を救った高木惣吉海軍少将の遺品を受け継ぐ資料館

住所　熊本県人吉市矢黒町1970-5
電話　0966-24-5522
（桃李温泉 季の杜 石庭内）

開館時間　お問い合わせください
（要予約です）
休館日　水曜日
入館有料、無料駐車場あり

第二次世界大戦時、密命を受け終戦工作（戦争を早期に終わらせるための工作）に身を呈した、人吉出身の高木惣吉の遺品等を展示した記念館。
「本当の豊かさとは？」「平和とは？」を考えさせられる資料の数々が展示されています。

高木 惣吉（たかぎ そうきち）
1893年8月9日～1979年7月27日（人吉市名誉市民）
貧しい家に生まれ、働きながら独学で海軍兵学校への入校を果たし、海軍大学校を首席で卒業する。各方面と連携をとりながらの終戦への基盤づくりを行った功績は大きいとされる。（Wikipediaより）

ひみつ基地ミュージアム

山の中の海軍の町にしき

⚓戦争末期の情勢と人々の生活を肌で感じる

「山の中の海軍の町にしき ひみつ基地ミュージアム」

住所　球磨郡錦町木上西2-107
電話　0966-28-8080

開館時間　10：00～16：00
（最終入館 16：00）
休館日　火曜日
（祝日の場合は翌日）
入館500円、無料駐車場あり
（小中学生300円）

錦町立 人吉海軍航空基地資料館

太平洋戦争末期の1943年、「人吉海軍航空基地」は、九州山地にかこまれた、海のない人吉盆地につくられました。
錦町・相良村につくられた広大な飛行場や教育施設、無数の地下施設。これらはなぜつくられ、どのような活動をしていたのか。そして、地域の人々との関わりはどうだったのか。
「山の中の海軍の町 にしき ひみつ基地ミュージアム」は、戦争末期の情勢と地元の人々の生活を肌で感じる「フィールドミュージアム」の玄関です。
当時を生きた人々の証言や、残されたものを通して、命の尊さや平和の大切さについて考えるきっかけとなることを願います。

（別添６）

中面　中に巻き込まれる面

【有志宮腰製】

～山の中の海軍のまち～

人吉球磨の海軍遺産

食べる
人吉市

・あゆの里	0966-22-2171	九日町30
・和彩二代目	0966-23-2241	紺屋町108
・カミナリ食堂	0966-32-9182	紺屋町28-1
・鍋屋本館	0966-22-3131	九日町22-2
・グルメ桑原	0966-23-4147	蟹作町1521
・ナチュラル	0966-22-7189	瓦屋町1156-1
・石庭	0966-22-3637	矢黒町1970-5

錦町

・彩食三昧ふじ	0966-38-3253	一武2826-11
・味処みやざき	0966-38-4555	一武1950-11
・ペンギン	0966-38-3558	西3287-37

食べる

あさぎり町		
・ラ ポルタ	080-6418-0179	免田東1483
・恒松ラーメン	0966-45-3106	深田西177
多良木町		
・囲炉裡	0966-42-2789	多良木1385-2
・ナチュラル	0966-42-2262	多良木1042-2
湯前町		
・レストラン徳丸	0966-43-4000	湯前町1792-7
水上村		
・やまちゃん	0966-46-0067	湯山1546

・有志会は、人吉球磨の海軍遺産の保存と活用に取り組んでいる民間ボランティアです。「地域を潤し、歴史を残す」ことを目ざしています。
連絡先　koichi.fukuda@mbo.sbi-u.ac.jp

なお、本件に関しては、次のように報道された。参考までに引用して紹介したい。

「人吉球磨の海軍遺産の保存と活用に取り組む民間ボランティアの有志会はこのほど、郡市の海軍に関連する資料館や記念館（中略）を紹介するガイドマップ（写真）を作製した。有志会は『地域を潤し、歴史を残すこと』を目指してボランティアで活動中。今回も無償で取り組んだ。同マップはＡ４サイズの３つ折。軽巡洋艦『球磨』の記念館がある艦内神社の里宮神社＝湯前町＝、本土決戦から日本を救った海軍少将・髙木惣吉の資料館＝人吉市＝、人吉海軍航空隊の戦跡から学ぶ人吉海軍航空基地資料館＝錦町＝の３館を紹介。」[25]

この３館連携によって、人吉球磨地域における観光振興に貢献できれば、錦町立人吉海軍航空基地資料館の費用対効果も高まっていき、その存続に役立つであろう。当時の筆者はそのように考え、３館連携戦略に取り組んだのであった。

5.2　３館連携戦略の広報面での成果

上記「２　広報面での工夫」の成果でもあるのだが、３館連携戦略を含む筆者の取り組みは、小樽商科大学の内田純一教授の興味関心をひき、その研究対象となった。その結果として、学術書に錦町立人吉海軍航空基地資料館、軽巡洋艦球磨記念館、高木惣吉記念館の３館が掲載された[26]ことは、広報面で有意義なものであった。本件に関する報道について、参考までに引用して紹介したい。

「北海道の小樽商科大学の内田純一教授（46）がこのほど、初めて郡市入り。専門である観光経営学の視点から、錦町の人吉海軍航空基地跡を活用した観光への取り組みを調査した。（中略）内田教授は、同基地跡の調査、情報発信に尽力する民間有志の福田晃市氏を通し、一連の取り組みが研究を進める『地域発で行う観光振興』の成功事例にないユニークさに関心を持った。」[27]

「新刊『いま私たちをつなぐもの―拡張現実時代の観光とメディア』が、２月に弘文堂から発行された。（中略）第６章では、北海道の小樽商科大学の内田純一教授が『旧海軍のバトルフィールド・ツーリズム～人吉球磨の海軍遺産の取り組みを中心に～』を執筆。（中略）内田教授が以前から高木惣吉記念館、人吉海軍航空基地資料館、軽巡洋艦『球磨』記念館での調査を続けてきた成果をまとめている。」[28]

5.3　３館連携戦略の終焉

人吉海軍航空基地跡を保存・活用するための取り組みから始まり、３館連携戦略の推進に至るまでの一連の取り組みは、次のように評価され、将来性の見込めるものであった。

「それまでほとんど注目されることのなかった人吉球磨の海軍遺構は、福田らの手によって 2014

25　「郡市の「海軍」関連ガイドマップ作製」『人吉新聞』2019 年３月１日
26　内田純一／「第６章　旧軍のバトルフィールド・ツーリズム―人吉球磨の海軍遺産による観光振興の取り組みを中心に」／『いま私たちをつなぐもの - 拡張現実時代の観光とメディア』／弘文堂／ 2021 年
27　人吉海軍航空基地跡　観光活用を調査　小樽商科大の内田教授訪れ」『人吉新聞』2018 年３月 10 日
28　人吉球磨の海軍遺産も詳しく　拡張現実主題に弘文堂が新刊発行」『人吉新聞』2021 年３月４日

年に再発見されてから潮目が変わった。一連の活動により、わずか数年でこの隠れ里は、旧海軍をテーマとするバトルフィールド・ツーリズム・サイトへと進化したのである。」[29]

しかしながら、この取り組みは、失敗に終わる。官民一体の取り組みを標榜してきたが、官サイドの錦町立人吉海軍航空基地資料館と、民サイドの軽巡洋艦球磨記念館及び高木惣吉記念館との連携が十分に機能しなかったのである。

5.4 「狡兎死して走狗烹られ、飛鳥尽きて良弓蔵わる」

官民の連携が十分に機能しなかった理由については、分析が未了であるので詳述は控えるが、あくまでも筆者ら民サイドの立場から記述するなら、筆者ら民サイドは、コミュニケーション面、コンプライアンス面、ガバナンス面において、資料館運営スタッフとの関係の維持は困難と判断し、資料館運営スタッフとの関係終了を決断した、ということになる。

いずれにせよ、その後、筆者ら民サイドは人吉海軍航空基地跡を保存・活用するための取り組みから離れ、軽巡洋艦球磨記念館及び高木惣吉記念館の運営・広報に注力することになった。それは後に「３艦館連携」（軍艦「矢矧」にゆかりのある矢作神社、軍艦「大和」にゆかりのある東海地区戦艦大和会、軍艦「球磨」にゆかりのある市房山神宮里宮の連携）や「武士でつながる日台友好」という形で発展していくことになるが、それは別の機会に検証したい。

おわりに

先行研究に「福田はこれまで、人吉球磨地域における海軍遺産の観光資源としての可能性に最初に着目し、錦町がひみつ基地ミュージアムを建てるきっかけを作り、軽巡洋艦球磨記念館を整備し、さらに高木惣吉記念館のリニューアルにも関わってきた。」[30] とあるように、筆者らの活動は、人吉球磨地方にこれまでなかった新たな観光カテゴリー「海軍」を確立することに成功したと言える。

しかし、錦町立人吉海軍航空基地資料館がオープンして以降、筆者らは人吉海軍航空基地跡を保存・活用するための取り組みの成果を放棄し、軽巡洋艦球磨記念館と高木惣吉記念館のみとなった状態からの再出発を余儀なくされた。それはまるで、漢の劉邦が咸陽一番乗りを果たしたにも関わらず、項羽に武力面でかなわず、咸陽一番乗りの功績を項羽に譲り、みずからは辺境の地に追いやられてしまったようなものであった。

無名だった人吉海軍航空基地跡の知名度が高まっていったのは、既述のとおり、様々な取り組み主体の活動あってこそのものであったが、それらがすべてなかったかのようになってしまったことは、痛恨事であった。筆者は今でも３館連携戦略は人吉球磨地方の振興にとって有益なものになるものだったと信じているが、今となっては夢のまた夢である。

その後、筆者に中国兵法の知識に加え、人吉海軍航空基地跡を保存・活用するための取り組みによ

29 内田純一／「第６章　旧軍のバトルフィールド・ツーリズム―人吉球磨の海軍遺産による観光振興の取り組みを中心に」／『いま私たちをつなぐもの - 拡張現実時代の観光とメディア』／弘文堂／ 2021 年／ p 119

30 内田純一／「第６章　旧軍のバトルフィールド・ツーリズム―人吉球磨の海軍遺産による観光振興の取り組みを中心に」／『いま私たちをつなぐもの - 拡張現実時代の観光とメディア』／弘文堂／ 2021 年／ p 121

るノウハウの蓄積があったことから、軽巡洋艦球磨記念館と高木惣吉記念館を主体とした取り組みは、公的支援もなく、私費によるものであっても、成果につながっていった。それは、たとえば、次のような評価につながっている。

「なかでもこの熊本の事例で特筆すべきなのは、やはり郷土史家たちの活躍だった。近年、高校教諭が多忙になり、郷土史の担い手が減っているとされるが、かれらの活動はまさに干天の慈雨ではないか。しかも展示解説が中立的なのがよかった。高木記念館や球磨記念館の展示はカオスなようでいて、現代日本の一側面を確実に描写していた。民間運営のミュージアムなどをめぐる意義は、まさにこうした複雑な社会の層を掘り起こし、記録する営みにこそある。」[31]

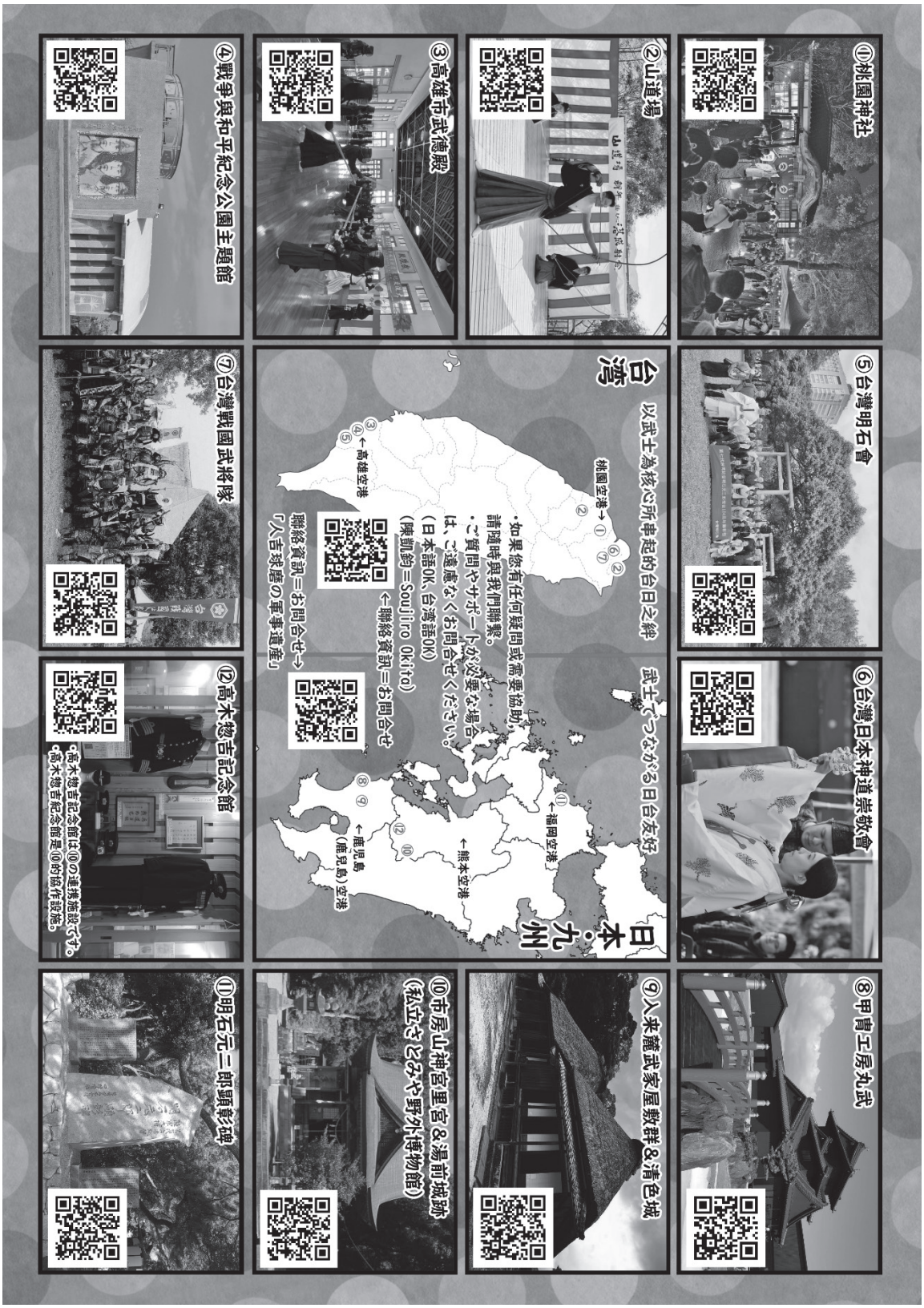
最新の取り組みとしては、「武士でつながる日台友好」の取り組みの中に、軽巡洋艦球磨記念館の運営主体である市房山神宮里宮と、高木惣吉記念館を組み込み、民間の活動ながら、地域をこえ、国境をこえた取り組みへと拡大していっている。（別添７）（別添８）

今後、人口減少によって地方は存亡の危機に立たされることは確実となっている。筆者は今後とも、今のうちに地域振興のために個人レベルで可能なことに取り組み、少しでも経世済民の実現に貢献したいと考えている。以上をもって本稿を終えたい。

31　辻田真佐憲／「『ルポ　国威発揚 -「再プロパガンダ化」する世界を歩く』／中央公論新社／ 2024 年／ p 371

人吉海軍航空基地跡の保存・活用の取り組みの成功と失敗の記録

（別添７）



（別添８）

以武士為核心所串起的台日之絆
武士でつながる日台友好

在過去，武士會到神社前祈求勝利。有時也會在城堡內建造神社，以獲得神靈的庇佑。例如，武將東直政在「湯前城」（熊本縣球磨郡湯前町）內重建了若宮神社。

甲冑（盔甲）是武士的裝備與象徵。「甲冑工房丸武」（日本鹿兒島縣薩摩川內市）以製作並展示精緻的盔甲聞名。經常可以從電影與電視劇中，看到該公司所生產甲冑產品，同時也可以其盔甲的精細與講究。在台灣，有一群日本武士甲冑愛好的團體，「台灣戰國武將隊」將日本甲冑文化，推廣並讓更多人可以參與。

「甲冑工房丸武」附近，有個武士居住的村莊「入来麓武家屋敷群」。這裡還有座「清色城」。在武士的時代中，這座城堡和村莊扮演者著戰時的防禦設施的角色。

武士文化中常見的劍道、弓道等武道。台灣也有教授。於「高雄市武德殿」進行教學的武道，便是由台灣劍道聯盟會長，同時也是宮本武藏「奧義免許皆傳兵法二天一流第十一代宗家」的陳信寰老師，教授劍道、居合道及古武道。在汐止、新竹擁有練習場地的「山道場」，也有進行日本弓道的教學，此兩個道場，也是目前台灣唯二安有神棚，且有日本神道儀式的武道館。日本戰前在海外神社保留最完整的神社-桃園神社，在重新規劃後，也有許多神社相關的活動。

此外，台灣亦在日本文化交流上努力的團體，如「台灣明石會」是一個以台灣第七任總督明石元二郎為主體的研究及彰顯的團體，明石出身於武士世家，任台灣總督期間，替台灣做出許多貢獻，而且遺言是葬在台灣，持續守護台灣，目前他的墓地在台北，在明石的故鄉日本福岡市的筥崎宮，建有「明石元二郎紀念碑」。其理事長亦是老兵協會的理事長，其場館「戰爭與和平紀念公園」，亦對二戰中為國犧牲的士兵，有詳加的紀錄。

近期，台灣也成立了「台灣日本神道崇敬會」是台灣第一個以日本神道及神社為核心的團體，希望未來可以成為與日本文化交流的橋樑。

（寫作合作：台灣日本神道崇敬會＆台灣明石會　事務局長　陳凱鈞）

（寫作合作：高木惣吉記念館＆軽巡洋艦球磨記念館　福田晃市）

かつて日本の武士は、神社で必勝を祈願し、また、神様の加護を得るために城内に神社を建立することもありました。たとえば、武将の東直政は、「湯前城」（熊本県球磨郡湯前町）内に若宮神社を再興しています。

武士にとって重要な装備品として甲冑があります。その甲冑の精巧なレプリカを製造し、展示しているのが「甲冑工房丸武」（鹿児島県薩摩川内市）です。映画やドラマで使う甲冑の製造販売を行う会社で、甲冑の製造過程を見学することもできます。「台湾戦国武将隊」は、台湾の甲冑愛好団体です。甲冑を身に着け台湾で活動しています。

「甲冑工房丸武」の近くには、武士たちの暮らした集落である「入来麓武家屋敷群」があります。ここには「清色城」もあります。武士の時代、有事には城とあわせて集落全体が防衛施設として機能しました。

武士の文化には剣道や弓道などの武道があり、それらは台湾でも教えられています。「高雄市武德殿」では、陳信寰先生が剣道、居合道、古武道などの武道を教えています。陳信寰先生は、台湾剣道連盟の会長で、宮本武蔵の「奥義免許皆傳兵法二天一流第十一代宗家」です。台湾の汐止と新竹に道場をもつ「山道場」では、日本の弓道を教えています。台湾では、この「高雄市武德殿」と「山道場」だけが神棚を備えており、日本の神道の儀式を行っています。戦前の台湾にあった日本の神社の形式を完全に保っているのが「桃園神社」です。戦後に（廃社されましたが）再建されてからは、さまざまな神社関係の活動が行われています。

また、台湾には日本文化をつうじての交流に尽力している団体もあります。たとえば「台湾明石会」は、第７代台湾総督の明石元二郎（陸軍大将）のことを研究・顕彰している団体です。明石元二郎は、武士の家系の出身で、台湾総督だったとき、台湾のために多くの貢献をしました。その遺言は「私を台湾に埋葬してほしい。守護霊となって台湾を守り続けたい」というもので、現在その墓は台北にあります。明石元二郎の故郷である福岡市の筥崎宮には「明石元二郎顕彰碑」が建立されています。「台湾明石会」の理事長は、老兵協会（台湾人日本兵に関する団体）の理事長でもあり、公立資料館「戦争と平和記念公園主題館」も運営しています。そこでは第二次世界大戦で国のために命をささげた兵士たちの詳細な記録を残しています。

このごろ台湾で設立された「台湾日本神道崇敬会」は、台湾ではじめて日本の神道と神社に焦点をあてた団体です。将来的に日本との文化交流のかけ橋になりたいと願っています。（執筆協力：陳凱鈞＆福田晃市）

位於薩摩川內市的新田神社（背面地圖⑧）是薩摩武士們崇敬的神社，也是日本海軍輕巡洋艦「川內號」的守護神。

薩摩川内市内（裏面地図⑧）にある新田神社は、薩摩武士たちに崇敬された神社です。その神様は日本海軍の軽巡洋艦「川内」の守護神にもなりました。